

【報告】

鹿児島大学医学部保健学科紀要

26(1) : 51 - 58, 2016

ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業の活動報告

— JICA短期ボランティア派遣事業 —

松田 史代¹⁾

要旨 独立行政法人国際協力機構 JICA 短期ボランティア事業「ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業」に理学療法学専攻の学生と参加し、ペルー共和国の首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター (INR) および周辺施設で障がい者スポーツ普及支援活動を行う機会を得た。今回の派遣は、理学療法士 2 名と理学療法学専攻の学生 8 名の計 10 名での派遣であった。ペルー共和国では、INR のメディカルドクター (専門: 脳損傷部門) と理学療法士を中心としたコ・メディカル・スタッフ、インターン生とカウンター・パートナーを組み、INR 内での各部門での集団リハビリテーションの一環としての障がい者スポーツ普及促進支援、ペルー国立競技場で開催された障がい者スポーツ指導員養成講習会の講師およびデモンストレーション、同じくペルー国立競技場で開催された障がい者スポーツイベント大会での活動支援および参加を行ったので若干の考察を加えここに報告する。

キーワード: 障がい者スポーツ, リハビリテーション, 理学療法, 国際交流, 国際協力

I : 活動の背景

JICA は、開発途上国への国際協力を行う日本の政府開発援助 (ODA) を一元的に行う実施機関である。1954 年に日本の技術協力事業を行うことを主旨として開始され、その後海外への技術提供のみならず、研修生の日本受け入れや日系人への支援、円借款による有償資金協力や無償資金協力など多岐に渡る支援を展開している独立行政法人である¹⁾。特に 2015 年は初代青年海外協力隊員がラオスに旅立ってから 50 年の節目の年であった²⁾。開発途上国への技術協力のひとつの分野として、保健・医療分野があり、その中に理学療法士枠、社会福祉枠に障害児・者支援があり¹⁾、今回有資格者は理学療法士枠で、理学療法学専攻の学生は障害児・者支援枠での派遣となった。

また、青年海外協力隊は原則 2 年の派遣活動を行う長期ボランティアの認知度が高いが、要請が出れば 1 か月

以上 1 年未満の短期ボランティアもある¹⁾。今回は、学生の学業への影響を考慮し、夏休み期間を利用して 8 月中旬から約 1 か月の短期ボランティアでの派遣となった。

受け入れ先の INR には 2012 年～2014 年に現九州医療センターのリハビリテーション部副部長理学療法士長の広田美江先生が長期シニアボランティアで派遣され、障がい者スポーツの立ち上げを行った³⁾。広田先生の活動期間中に第 1 回ペルー障がい者スポーツ指導員養成講習会が立案され、その人的支援で 2014 年に第 1 次短期ボランティア (理学療法士 2 名、学生 8 名) が派遣された^{4) 5)}。今回は、前年の活動を踏まえての第 2 回ペルー障がい者スポーツ指導員養成講習会の開催および対象疾患の拡大、多部門との連携の任を受けての派遣となった。

II : 派遣までの過程

2014 年春、全国公募で JICA のホームページ上で募集

¹⁾鹿児島大学医学部保健学科臨床理学療法学講座

連絡先: 松田 史代

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6801

E-mail: fumiyo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

要請がアップされた。必要書類（応募者調書、応募用紙、健康診断書、語学力申告等）を記載し、郵送で応募した。今回の応募にあたり、理学療法専攻1～2年生（応募時）に参加希望者を募った。応募時で20歳以上との年齢条件があり、数名の学生は参加を希望したが年齢が達せずに応募できなかった。学生の希望者と鹿児島県障がい者自立交流センターを訪問し、事前に障がい者スポーツについてのレクチャーを受け、休日等を利用し派遣までに実際の障がい者スポーツにボランティアとして参加し、知識技術について更に習得した。3月下旬に一次審査可否発表があり、鹿児島大学からは学生1名不合格となり、4月16日の二次面接へ学生5名と共に臨んだ。二次面接では、これまでの活動経験やペルーに派遣された際の活動への具体的なイメージ等が問われると予測し、事前に模擬面接の練習を行った。その結果、学生5名全員が合格でき、8月のペルー派遣が正式に決定した。後々判明したことが、理学療法士枠の応募は多数あり倍率が高かったようで、周囲の関係者からは心配されていたようだ。また学生枠も多数の応募があり、他大学でも一次審査および二次審査で数名が不合格となっていた。その後、6月上旬にJICA東京にて短期ボランティア全体の派遣前研修会があり、セルフ・ディフェンスや交通事情、文化事情、感染症対策等、発展途上国に派遣される上で必要な知識を学んだ。この派遣前研修で、今回のペルー障がい者スポーツ支援派遣事業の派遣予定者とはじめて顔合わせを行い、自己紹介、ペルーでの担当の割り振り、連絡網等の作成など派遣に向けて具体的な予定および役割を決めた。

派遣までに必要な予防接種を行い（私たちは、熱帯雨林へは行かないためワクチンは黄熱病のみであった）、各自担当競技の企画書作成を行った。

前回の派遣は、脳損傷部門のみで指導員養成講習会のデモンストレーションも日本側の学生で行った^{4) 5)}が、今回は対象部門が脊髄損傷部門・切断部門・小児発達部門・知的学習障害部門と多岐に渡り、指導員養成講習会でのデモンストレーションは実際にINRの患者さんに参加してもらうこととなっていたため、実際の患者さんの障害レベルが分からない中の企画書作成で学生共々苦労した。作成した企画書は、渉外促進シニアボランティアの方が日本語からスペイン語へ翻訳してくれるため、翻訳期間も考慮し7月末までを締め切りとしたが期末試験と重なり、学生も試験勉強に加え企画書作成で大変であった。

Ⅲ：派遣前合同合宿

8月8～9日に国際医療福祉大学大川キャンパスで事前合同合宿を行った。昨年、国際医療福祉大学の教員お

よび学生が活動を行っており^{4) 5)}、また元シニアボランティアの広田先生³⁾も参加できる環境を考慮し、大川キャンパスでの合宿の運びとなった。鹿児島での合宿案も出たが、体育館の使用や障がい者スポーツ競技の備品がないため、今回は断念した。

合同合宿で、お互いの役割の再確認や、それぞれ担当の競技のデモンストレーションを行ったが、説明や指示不足、円滑な進行ができない、声が小さく指示が通らない、アシスタントの動きが不明確、スタッフ（学生）間の連携が取れていない等の問題が数多くあがり、派遣1週間前であったが、企画書の再度見直しや、企画書とは別に視覚的に説明できるようにポスターの作成を行った。

今回の合同合宿を行った利点として、1：国際医療福祉大学と鹿児島大学2校の教員・学生の派遣であったため、事前合宿が可能であった（九州内との地理条件含む）、2：広田元SVはじめINR事情を知っている人からの事前アドバイスは、派遣前にイメージを描きやすく、ペルーの国民性や注意点等参考になった、3：派遣前に一緒に動きを確認できたこと、共同で行ったことによりグループ内に連帯感が芽生えた、4：派遣前に模擬することによって学生の意識向上、自覚がみられた、が挙げられた。また、これらを踏まえて派遣後改めて事前合同合宿を振り返り、それでも実際派遣されると現場の状況により変更点も多くあり、日々翻弄された種目もあったが、事前に全員で流れ・動きを理解していたために、全員でフォローすることが出来た。合宿時にアドバイスで、講習会時に言葉で伝わりにくいところはイラストを作成したり、簡単な説明できる備品を作成したりと、派遣前に国内で道具をある程度揃えられた。特に、レクリエーションスポーツの輪投げで使用する水道用ホースはペルーで簡単に入手できるだろうと思っていたら、なかなか店頭で見つけられず入手するのに苦労した。そのため、国内で入手でき、荷物としてかさ張らないものは日本から持って行ったほうが良いことが経験から得られた。縄跳び用の縄も、ペルーではとても高価で日本から持って行って正解であった。

Ⅳ：企画書作成

各競技内容は、事前に元シニアボランティアの広田先生³⁾と昨年ペルーへ派遣された国際医療福祉大学の教員⁵⁾、およびINR派遣中の渉外促進シニアボランティアが、INR内の環境や部門の特性を考慮し、切断部門はアンブティサッカーと卓球、脊髄損傷部門は車椅子バスケットボール、小児発達部門はレクリエーションスポーツ（輪投げ、ボーリング、風船バレー）、知的学習障害部門はポートボールと（大）縄跳び、と決まっていた。

そのため、6月JICAでの派遣前研修会時に各競技担

当の学生を決定した。企画書掲載内容としては、1：競技の説明（競技性、効用、人数、使用備品・コートの規定等）、2：ルールの説明（得点になる例、ならない例、反則・違反等）、3：練習内容（実際に行う練習を動きや役割を詳細に表記）、4：試合内容（どのように試合を行うか表記）、5：備考欄：使用（必要）備品の詳細な説明、コートの見取り図、審判の動き、講習会当日の役割一覧、参考ルール等の記載、を記載した。後々渉外促進シニアボランティアに日本語からスペイン語に翻訳してもらうため、文章は短く簡潔に、かつ図を多く用い視覚的にアピールすることに特に配慮した。

競技担当学生は、所属大学教員へ提出し、教員のチェックを受け適宜訂正し、最終版を渉外促進シニアボランティアへ教員から提出した。翻訳上での問題点はその都度教員が連絡を受け、変更・訂正もしくは追記した。ペルー派遣中の INR 側との競技ミーティングで変更点が生じ、最終版は INR 内で患者さん参加型の事前ペルー障がい者スポーツ指導員養成講習会練習前日の8/27までに完成した。

また、ペルー派遣中も全員が全競技を把握することでフォローする体制を作るために、土日に公園でデモンストラーションの動き・全体の流れを確認する作業や、平日も毎日必ずミーティングを行いその日おこなった競技の反省点や改善や変更が必要ないか全員で毎日見直す作業を行った。企画書上変更が必要な箇所は渉外促進シニアボランティアに翻訳してもらい翌日には最新版になるように手厚い協力体制を支援していただいた（図1）。

V：ポスター制作

各競技、企画書を作成したが今回はミーティング時間が限られており、またスペイン語・英語は流暢ではないため、円滑かつ要点を絞った説明が出来るように競技によってはポスターを作成した。また、講習会本番での確

に読んでもらうように進行の流れに沿って手帳を作成した競技もあった。

ポートボールの例では、反則時の審判のジェスチャー、試合の流れ、各ポジションの役割の説明、基本的なシュート、パス、ドリブルの仕方、練習での流れについて図をメインとしたポスターを作成し、車椅子バスケットボールの場合は、基本的な規則の説明、反則例と審判のジェスチャー、競技用車椅子の操作方法、練習の流れについて同じく図をメインとしたポスターを作成した。競技により、伝えたいポイントが異なっていたため、学生と話し合い何をメインで伝えたいのか情報を絞り、また講習会本番に聴衆にも見えるように大きく提示できるように留意した（図2）。

VI：派遣日程

2014年8月17日（月）～9月11日（金）の日程でペルー共和国首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター（INR）、Federico Villarreal 大学、ペルー国立競技場、ペルー JICA 事務所、ペルー日本大使館、ペルー移住資料館を訪問した。

VII：派遣メンバーの内訳

理学療法士有資格者枠で、2名（鹿児島大学医学部保健学科理学療法学内教員1名、東京都の臨床勤務の理学療法士1名）、障害児・者支援枠で鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻3年生4名、2年生1名、国際医療福祉大学大川キャンパス理学療法学専攻4年生2名、3年生1名の計8名で構成された。

VIII：活動内容

到着1週目の前半は、JICA ペルー事務所到着式やオリエンテーション等を行い、ペルー日本大使館表敬、ペルー移住資料館を訪問した。到着週の後半で、メイン



図1

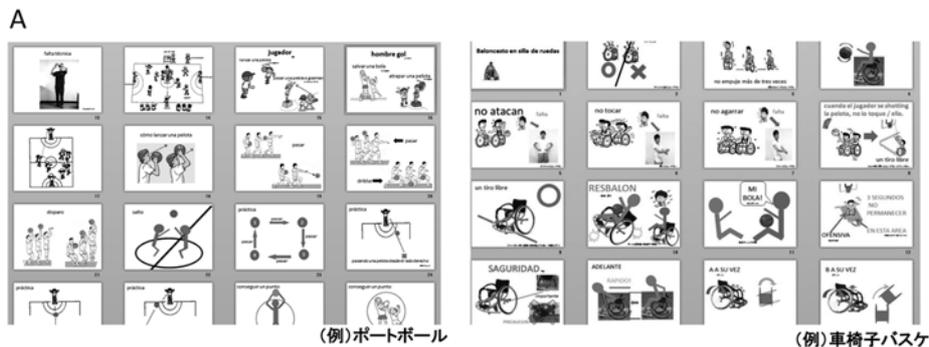


図 2

の活動施設である INR へ訪問し、自己紹介、施設見学、カウンター・パートナーの紹介、それぞれのこれまでの障がい者スポーツへの活動紹介等を行い、今後の日程の確認等を行った。翌週（活動 2 週目）より、各部門の実際のリハビリ見学、講習会での実技競技の初回ミーティングを事前準備してきた企画書・ポスターを使用して行った。翌日、各競技 1 時間半ごとに実技伝達ミーティングを行い、各自再検討事項や変更事項等を確認した。また、Federico Villarreal 大学へ半日伺い、2、3 年生の学生と障がい者スポーツを担当している教員に向け日本での障がい者スポーツへの取り組みの紹介や学生による日本文化紹介、大学の施設見学を行った。活動 3 週目の月曜日に実際講習会で実技を行うペルー国立競技場を INR スタッフとともに視察し、場所や用具設置場所の確認等を行った。火曜日は午前中 INR 玄関エントランスホールにて日本文化紹介（忍者の恰好で習字、折り紙、あやとり等）を行った。水曜日・木曜日は、メインイベントである第 2 回ペルー障がい者スポーツ指導員養成講習会であった。開会式のあと、スライドを用いた障がい者スポーツの種類・実際、一次救命講習会を行った。水曜日の午後および木曜日終日、2 競技同時開催で対象全 6 競技を実際の INR の患者さんに参加してもらい実技講習会を実施した。金曜日はペルー障がい者スポーツイベント大会を行い、INR およびリマ周辺医療施設対抗のスポーツ大会を行った。最終週は、JICA ペルー事務所にて報告書作成・提出や、活動報告会を行い日本への帰路へと着

いた。帰国後翌日、JICA 東京本部にて活動報告会を実施し、今回の全派遣事業すべてを完了することとなった。

区：昨年の派遣との相違点

今年の派遣と昨年の派遣の一番大きな相違点は、派遣中の理学療法士シニアボランティアが INR に在職していたかどうかの点である³⁾。昨年の派遣は、理学療法士シニアボランティアが派遣中であり、また派遣中の部門への短期ボランティア派遣であったため、人間関係が既に築けており、また事前の打ち合わせも入念に行えた。今年は、渉外促進シニアボランティアは INR に派遣中であったが医療専門職ではないため INR 側との交渉は可能だが、専門的な打ち合わせ等が事前（派遣前）に困難であった。また、全てのスタッフとお互い初対面であり、打ち解けるまでに若干の時間を要した。しかし、多部門との連携ができたことで競技性の幅が出来、またいろいろいな部門スタッフと交流できたことは利点であった。

次に、昨年は講習会の対象疾患が単部門（脳損傷部門のみ）であり、対象患者さんが限られているのでリスク管理等の面でやや安心な点や事前の打ち合わせが比較的行いやすい環境であった。今年は、4 部門（脊髄損傷部門、切断部門、発達障害部門、知的学習障害部門）で事前の打ち合わせを部門毎に行う必要があり時間配分や環境にやや苦労した。また、対象患者さんの幅が広く、リスク管理等の面で部門ごとにまったく異なるため、打ち合わせや確認事項も多く、混乱する学生もいた。しかし、

入念な事前準備の必要性、要点をまとめた伝達を考慮することで、学生の意識向上が著しくみられた。

また、昨年の実技講習会はひとつの競技毎に実施していた^{4) 5)}が、今年の実技講習会は同時に二種目(競技)実施した。これは、INR側から限られた時間で多くの競技の実技講習会を行いたいとの依頼があったためである。ひとつの競技毎の実施だと、時間的余裕とスタッフ全員が全種目に参加可能(スタッフの充実)であるが、同時開催ということでスタッフが二分されるため、人手不足になる競技もあった。そのため、積極的にINRのインターン生の参加を促し、競技の特性やリスク等のディスカッションを深められた。

最後に、昨年の実技講習会運営スタッフは日本側のみで実施した^{4) 5)}が、今年の実技講習会運営スタッフはINR側と日本側の共同実施で行った。そのため、スタッフ間の言語の壁や、価値観の違い、限られた時間内で莫大な打ち合わせ内容に追われ、常に時間との闘いおよび調整の連続であった。大変な一方で、共同開催とお互いのモチベーション向上や、仲間認識の向上がみられ、絶好の国際交流の機会となった。特に、学生ははじめてのミーティングでは語学に不安があり渉外促進シニアボランティアや教員に通訳を依頼し、積極的に英語やスペイン語を話す場面は少なかったが、日々を追うごとに自ら単語レベルでも積極的に自分の言葉で伝えようとする姿勢がみられたことは大きな進歩であった。

X：今年の活動での問題点

今年の活動した競技を図3に示す。

まず、車椅子バスケットボールやアンプティサッカーはパラリンピック競技や国際大会もある競技ではあった

が、規定にあった競技用備品の準備必須であり、環境面の整備上の問題が挙げられた。競技を行う上で、競技用備品(車椅子バスケの場合は競技用車椅子、アンプティサッカーの場合はロフトランド杖)が必要不可欠であり、施設内に人数分の備品があるかどうかが重要となってくる。今回、競技用車椅子はINR内に5台あり、練習では交互に使用した。講習会では他施設から拝借することで対応した。アンプティサッカーのロフトランド杖は人数分準備したが、日頃からロフトランド杖を使い慣れておらず、リスク面を考慮し、講習会では患者さんは使い慣れている松葉杖で実施した。また、バスケットゴールがINR内になく、コートがコンクリートでアンプティサッカーには向いていなかった。規定上の問題として、今回はINR側スタッフの事前知識(競技規則や特性等)の知識がほぼ皆無であり、短い限られた打ち合わせ期間で、はじめからすべて説明し理解してもらうことに大きな労力を使い、時間を費やした。国際大会もある競技なので、厳密な競技規則があり、まずはINRスタッフ、患者さんに最低限の基礎知識があるほうが、練習等の円滑な運営を行えたと考える。

レクリエーションスポーツについては、競技性は低いが、発想によりいくらかでも展開可能な利点は挙げられるが、発想力次第なので、軸が必要(対象がぶれてしまう)であり、種目によっては備品や設備等が必要となってくる。今回は、ボーリングでピンをペットボトル・砂・ビニールテープで作成し、輪投げは水道用ホースを代用した。またシッティング風船バレーは風の影響により屋外で実施することが困難であった上に、座って実施するのも困難であった。

卓球については、競技人口の幅が広く、既に簡単なルー

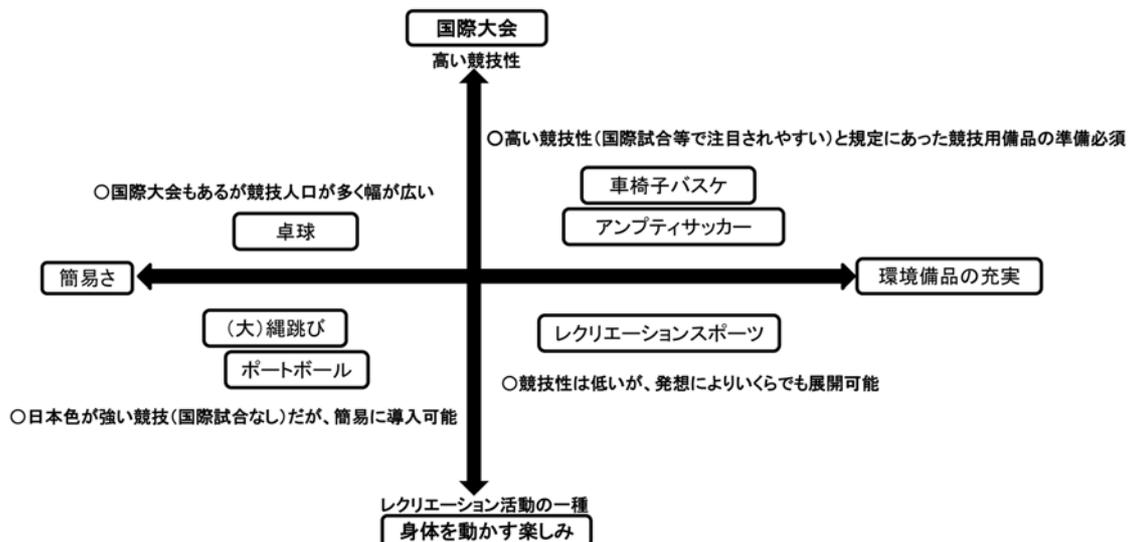


図3

ルややり方を知っているので、競技の進行はスムーズに進んだ。今回は、ペルー国内でも卓球競技人口の幅は広く、既に簡単なルールややり方を知っていたため、導入しやすく、試合まで展開しやすかった。しかし、既に知られている競技なので目新しさに欠ける上、個人戦が主であり、チーム力色が薄いという欠点もあった。

最後にポートボールや（大）縄跳びについては、大縄跳びは縄1本、ポートボールはボール一個あれば出来る競技であり、跳ぶ・投げる・走る・捕球する...とスポーツの基本的動作の複合体なため、動きの基礎を学べる利点が挙げられる。また、今回は知的学習障害部門を対象として実施したため、複合動作やチームプレイが苦手な児が多く、遊びの要素を多く取り入れながら、これらのことを学べたことで短い期間でも児の成長がみられた。しかし、国際試合のない競技なので、発展しにくいとの欠点もある。

全体的に、国際試合があるような競技を目指すと、初期導入としては環境設備面、技術面、知識面、時間でのハードルが高く、レクリエーション色が強くなると初期導入は簡易だが、その後の競技性に課題が残った。今後、障がい者スポーツの幅は広いので、どこに軸を置くか受け入れ側と協議し、特性を絞った競技種目を決定する必要性が考えられる。

XI：今後の展望

今後の展望として、まず INR スタッフには、昨年は日本側ですべてデモンストレーションを見せ、今年はスタッフとして実技講習会を共同で行った。INR 側は、この2年の JICA 短期派遣で競技を伝達する手段や段取りをある程度理解することができた。そのため、新しい競技を企画書作成から行う前段階として、この2年で行った競技については INR 側に企画書を残してきたので、残してきた企画書を INR 側で再度見直し、自分たちで

再考し、まずは院内で部門間の講習会を行い、競技を伝達する練習を行い、院外への講習会へ備えることが必要であると考えられる。今回の派遣で隊員全員が感じたこととして INR 内の部門間の連携稀薄があったので、疾患として共有できる競技（例えば、車椅子バスケットボールの場合は、切断部門と脊髄損傷部門のように）は多部門で行い INR 全体としてのチームワークを高めることが、今後のペルーの障がい者スポーツを伝達していく側としての体制が整い、リマ市内・市外で障がい者スポーツ指導員講習会を INR 側が主管として行い、ペルー全体へ普及させていくことへと繋がるとのではないかと考える。また、INR 側には実技（技術）面でもリードを図って頂きたいが、障がい者スポーツが社会から認知してもらうためには、学術的な面で社会へ発信することも重要である。競技介入前と介入後の身体的・精神的側面での客観的なデータの収集等を積極的に行い、学術的な面での障がい者スポーツの発展が社会へのアピールとなり、ペルーの障がい者スポーツのリーダー育成へと繋がるのではないだろうか。

また、患者さん側として、障がい者がスポーツに参加することで得られるメリットは、身体（肉体的）はもちろんのこと精神的面でも多い。競技の特性によるが、障がい者自身が指導者となることで独自の目線で得られることもあるし、共感も大きい。また雇用の場を作れるのではないかと考える。INR で競技を習得した患者さんが自宅へ戻り、その地区での指導的な役割を果たすことで、競技人口の増大や競技の認知度向上を図ることが出来る。のちのちはこのような制度を確立することで、障がい者自身の雇用の場も確保できる。社会にアピールすることで、福祉や社会保障の面での体制を整える機会が生まれる可能性もあげられるし、障害に対しての認知度向上等の社会的な面での働きかけが出来るのではないだろうか（図4）。

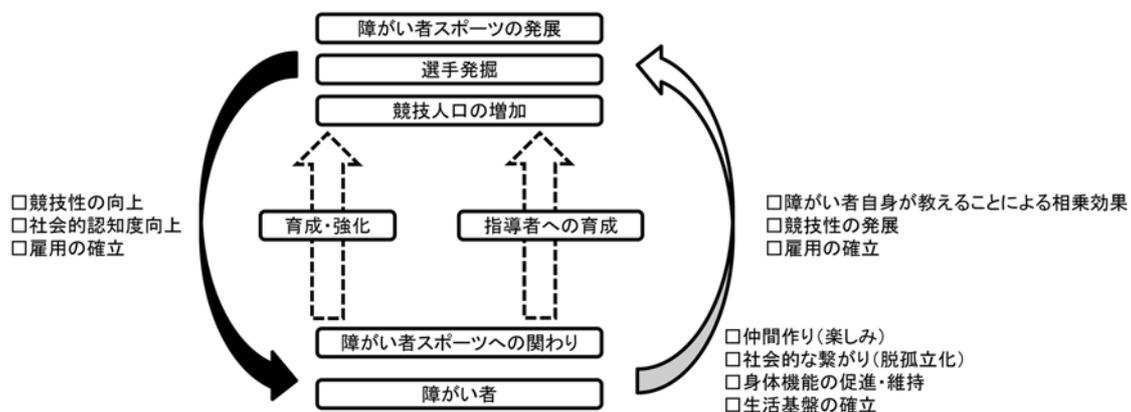


図4

最後に日本側の展望として、今回参加したことで日本側の問題点も認識することができた。まずは、日本ではペルーのようにリハビリテーションの一環としての障がい者スポーツへの取り組みがまだ確立されていないことが挙げられる。また、学生が主体として参加すること⁶⁾で、学生時代に国際経験を行うことで国際的視野を学べ、国際人としての育成、広い知見の獲得ができる。今回の活動を通じ、学生でも責任をもって参加することで自覚が芽生え、問題提起や解決方法、他者への伝達方法を異国の地で母国語ではない言語で行うことで、より強い自主性責任感が芽生えた。また派遣期間に関しては、夏休み期間で行うことで学業(単位)に対する心配がなく、追試を派遣期間中で受けられないため、勉学もより頑張る相乗効果もみられた。学生のための派遣は、リスク面等で問題があるが、時間的にもゆとりのある学生が積極的に参加できることで今後の進路や思考へ必ずプラスの経験となると考える。今回の活動を通じ、日本側へのメリットもかなり多く、他国の環境を見ることで自国を認識できること、自国の問題点に気づけることもあり、ボランティアは、受ける側よりも行く側のほうがより学ぶことが多く、今後の糧になることを今回学んだ。

XII: まとめ

今回、JICA 短期ボランティア事業「ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業」に理学療法専攻の学生とともに参加させて頂く機会を得た。今回の任務の目的は、ペルーでの障がい者スポーツ指導員講習会開催であり、スライドを用いた講義に加え、車椅子バスケットボール・アンプティサッカー・卓球・大縄跳び・ポートボール・レクリエーションスポーツを実際の患者さんに参加してもらっての実技講習を行った。患者さんの参加部門も、脊髄損傷部門、切断部門、知的学習障害部門、発達障害部門と多岐に渡り、INRの理学療法士・インターン学生と限られた短い期間でミーティングを重ね入念な準備を行い、当日はペルーテレビ局等、マスメディアの取材も受け活動紹介をすること出来、また多数のINR周辺施設のスタッフの参加もあり、講習会は大成功であった。ペルーは日本ほど医療や社会保障、福祉体制が整っておらず、また環境面でも車椅子バスケットを行うのにINRにゴールがない、アンプティサッカーでのロフトランドクラッチの調整が出来ない、縄跳びの紐が普通のロープ等問題もあったが、スタッフの意欲も高くかつ協力的で、とても助けられ、とても良い関係を築くことが出来た。

謝辞

このような貴重な機会を与えてくださった独立行政法人国際協力機構の皆さま、派遣期間中の安全面に考慮し

手厚い現地活動支援をいただきましたJICAペルー事務所の皆さま、今回の派遣事業を立案された九州医療センター 広田美江先生、今回の派遣内容を検討していただいた国際医療福祉大学 下田武良先生、私たちを受け入れてくださったINRのスタッフの皆さま、ペルーで出会ったすべての皆さま、そして現地での活動に多大なご支援をいただきました高木康夫渉外促進シニアボランティア、派遣事業に送り出してくださいました理学療法専攻の先生方に心から感謝を申し上げます。

文献

- 1) 独立行政法人 国際協力機構, <http://www.jica.go.jp/>
- 2) 独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局: クロスロード, 2015; 12. 15
- 3) 広田美江, 玉利光太郎: ペルー共和国におけるJICAシニア海外ボランティア活動を経験して, 国立病院総合医学会講演抄録集, 2015, 69, PageO-82-4
- 4) 木庭知美, 下田武良, 岡本龍児, 他: 理学療法科学, 2015, 30(6), p12
- 5) 下田 武良: ペルーにおける障がい者スポーツの普及・促進 JICA短期ボランティア活動報告, 理学療法科学, 2015, 30(6), p5
- 6) 山田力也: 障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究, 西九州大学・佐賀短期大学紀要, 2007, 37, p11 - 18

Support of disabled sport project in Peru by JICA for short-term volunteers

Fumiyo Matsuda¹⁾

1) School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima, 890-8544 Japan

Address correspondence to: Fumiyo Matsuda
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
Tel&Fax: +81-99-275-6801
E-mail: fumiyo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

Support for a disabled sports project for patients with several departments at the Peru National Disability Rehabilitation Center (INR), a center built with funds from Japanese aid. In this time, 8 students and 2 physical therapists (one of two is teacher) were joined as short-term volunteers to support this project by Japan International Cooperation Agency (JICA). We assisted in running a disabled sports coach training course at the Peru national Stadium in Lima, capital of Peru. This training course was designed to 1) cultivate local leaders and 2) facilitate the return of local patients to society. The course consisted of lectures by the official for Disabled Sports at the local Ministry of Sport, and technical coaching and demonstrations of wheelchair basketball, Amputee's soccer, port-ball, rope jumping, ping-pong, and recreational activities by the patients and medical staff in INR (mainly staff is physical therapist in INR) and us. The final day was a sport event that included participants from two other hospitals in addition to the INR. We had a great time, and had fruitful opportunity to learn about the disabled sports and rehabilitation.

Key words: Disabled Sports, rehabilitation, international Cooperation, Peru